

大分朝日放送(OAB) 報道・制作・4K制作のリアルタイム編集コラボレーションを実現

Avid共有ストレージ「ISIS | 1000」+ 編集機「EDIUS」

社報「OAB」No.30(2016年5月13日発行)に「4.14、4.16熊本・大分地震」報道対応のレポートがある。“全社一丸”のタイトルで「無人の報道フロアが約30分後に各部署の人であふれた(4・16未明)」という2度目の地震対応を次のように伝える。「今回、系列の多くの局から応援の申し出をいただいたが、より被害の大きい熊本へ系列のマンパワーを集中し、大分は自社で乗り切るという姿勢を貫いた(地震発生直後よりL字画面によるローカル情報提供を延べ8時間、ローカルマスターカットを9回、地震関連制作番組として8月放送の全国ネット『テレメンタリー』を制作)。この緊急報道体制をしっかりと支えたのが、新しく稼働したリアルタイム編集ネットワークシステムである。(レポート:吉井 勇・本誌編集部、写真提供:OAB)



4月16日未明の大分最大震度6弱の30分後、報道フロアには報道スタッフをはじめ制作部、アナウンサー、営業推進部、音声技術、関連会社など各部署のスタッフがあふれた

これまでにない斬新発想 大胆な局舎デザイン

OABを初めて訪ねた人たちは一様に驚く。本館エントランスまでの通路を植栽が被い、ゆったりとした曲線が招き入れるというアプローチは、他の放送局にはない。さらに、本館1階にある報道センターで驚く。黒を基調にした円形フロアで、どの位置からでも全体が見えるようになっている〔写真.01〕。道路1本を隔てた別館は2年前に改修を終え、編集セン



編集センターのドアを開けると斬新なデザインで編集室が並ぶ

ターがある。こちらも黒を基調に、コックピット感あふれる編集室の8室は狭いスペースに効率良く配置されている〔写真.02〕。

地方民放局は没個性の局舎と内部設備が多い。ところがOABは個性バリバリで、上野輝幸代表取締役社長が目指す「斬新かつ戦略的な放送局づくり」というメッセージを視覚で感じさせている。そして、このメッセージは本館と道路をはさんだ屋外も使う「OABガーデンスタジオ5」というユニークなスタジオから放送する生番組『5スタ』(毎週月～木・朝9時54分)を通じて視聴者にも届けられる。OABの目指すメッセージを“見える化”しているのだ。

地方民放初の「4K一貫制作」 積極的な国際展開

2015年6月に、地方民放で初となる4K番組制作の撮影から編集、仕上げに対応した「4K一貫制作システム」を編集センターに整備した。昨年の時点で自社制作した4K番組は、タイの公共放送局や台湾の民放などで放送されているという。もちろん自局番組として、4K制作・2K放送の番組『豊の国をゆく』(毎週土・朝6時30分～15分番組)がある。

編集センターに設置した4K専用の編集ルームとプレビュールームは、地元のプロダクションにも開放し、地元の制作力の底上げを



左から技術局長兼技術部長の塩川秀明氏と技術部課長の澤村孝志氏

図る。また、BS朝日との4K共同制作や、自社4K企画番組『司馬遼太郎の世界』シリーズと意欲的に動いている。多くの地方民放が4K制作に迷う中、この先駆けた動きに注目が集まる。

Avid「ISIS」と GV「EDIUS」の連携システム

報道と制作の両部門で、それぞれ別個にサーバーを導入する計画づくりが2年ほど前から始まっていた。ところが、4K制作のシステム構築も加わったことで、システム構築の基本の考え方を大胆に切り替えたと技術局長兼技術部長の塩川秀明氏は話す。「扱うデータ量が大きい4K制作をリアルタイムに編集できるサーバーシステムにする必要が出てきました。また、これまでの編集作業は、報道も制作もHDDボックスにデータを入れて編集室を渡り歩くというロスがあり、もっと集中して作業したいという要望が強くなりました」という課題を模